



行事案内

博物館文化講座

- 「王朝時代の琉球漆器について」
講師：前田孝允（漆芸家）
期日：5月28日（土）
- 「沖縄の地名」
講師：名嘉順一（那覇商業高校教諭）
期日：6月25日（土）
- 「史跡めぐり（宮古島）」
講師：知念勇（当館主任学芸員）
期日：7月9日（土）～10日（日）
- 「昆虫教室」
講師：長嶺邦雄他昆虫同好会
期日：7月30日（土）

企画展

「琉球の漆器」5月17日(火)～6月12日(日)

ごあいさつ

館長 大城立裕

4月1日に第9代館長として就任いたしました。敗戦後の廃墟の残片に出發した琉球政府立博物館を、ここまで育てあげてくださった諸先輩のあとを承けて、責任の重さを感じています。

県立博物館は沖縄文化の顔だと、よく言われます。秋に熊本市で催される「沖縄の美術工芸展」にはすくなくとも実力通りの展示を成功させたいものです。そのほかにも各種の展示会や文化講座など、職員は総力をあげて取り組んでいます。沖縄県立博物館の伝統が創られつつあって、その膨らみと磨きへ向かって進んでいます。

その点から、あらためていろいろの問題に直面しています。収蔵機能の改善が最も急務かと思いますが、総合博物館としてのシステムの研究もつづけていくべきでしょう。

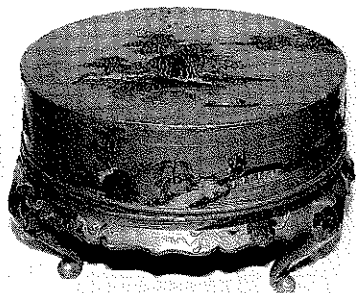
ご協力をお願いいたします。

〈企画展〉

琉球の漆器

▷会 期：昭和58年5月17日㊥～6月12日㊦

▷場 所：企 画 展 示 室



朱漆山水人物葡萄唐草堆錦東道盆

琉球漆器は、織物・紅型・陶器と並んで、沖縄の伝統工芸を支えてきた。以前は琉球漆器についてそれほど関心が寄せられず、琉球漆器を唐物、すなわち中国漆器とみなされる場合が多かった。ところが、近年の調査・研究の結果、琉球漆器に対する評価が大きく変わり、沖縄でも早い時期から漆器が製作されていたといわれるようになってきている。首里王府の中には漆工芸全般を管轄する貝摺奉行所が設置され、中国への進貢品や徳川將軍家その他への献上・進上品、あるいは注文品等を製作してきた。

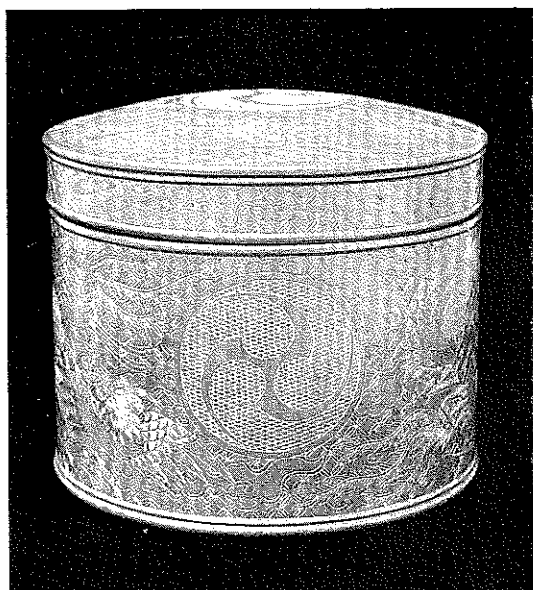
琉球の漆工芸の技法としては、螺鈿・堆錦などに特色があるといわれているが、古い漆工芸には沈金や箔絵の遺品が多く確認されており、そのほかに密陀絵・漆絵・堆朱・春慶塗・彫木等その種類は多種ある。現在確認される古い漆工芸品としては、1500年のオヤケアカハチの乱で功のあった久米島の君南風に尚真王が賜ったと伝えられる沈金丸櫃（「千代の真首玉」と呼ばれる曲玉を納めたといわれるもので、大小二つよりなる。県指定文化財）があり、そのほか伊是名村や奄美諸島にも同様な沈金や箔絵の丸櫃が残っている。

このように、琉球漆器は薩摩が侵入する以前の古琉球時代から製作され、その技術や文様は中国の影響が強く、日本本土の影響は比較的新しい時代になると思われる。日本の漆工芸を代表する蒔絵の加飾法は、まったく存在しないわけではないが、本格的な蒔絵の技法は導入されていない。これなどは日本本土の影響の薄さを示すものといえよう。小さな島国の中で育った漆工芸は中国的な

豪放さは感じられるが、反面、日本本土の漆工芸品に見られるような洗練された高度の技術、意匠や文様の緻密で表現力豊かなところが少ないところは否めない。

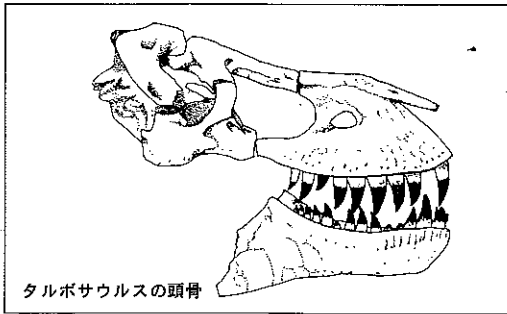
堆錦の加飾法については1715(尚敬3年)に房弘徳(比嘉乗昌)という人が創始したと『球陽』に記されており、湿度の高い沖縄の気候に適するというのもあって、琉球独特の技法として広く知られるところである。

今回、沖縄県立博物館所蔵の琉球漆器を一堂に集めて、企画展を開催するにいたったのは、琉球漆工芸の中に秘められた伝統工芸のダイナミズムと、われわれの祖先が残してくれた遺品の数々を広く県民に公開し、琉球漆器に関する意識の高揚をはかることを目的としている。琉球漆器の展示会は、過去に東京そのほかの地域で開催されたことはあるが、残念なことに肝心の地元沖縄で開催されたことはない。今回の展示会では、当博物館所蔵の琉球漆器を沈金・螺鈿・箔絵・堆錦等を技法別に配置し、琉球漆器のもつ多様さと変化を理解できるように配慮した。



朱漆鳳凰巴紋七宝繫沈金曲玉入

—「移動博物館」を平良市(宮古島)で開催—



当館では、遠隔地の県民にも等しい博物館利用の機会をつくるため、昭和54年以来「移動博物館」を実施しています。本年度の第7回目は平良市で開催します。特に、今回は、地元からの要求もあって、サウロロフスなどの恐竜類をはじめその他の化石を中心に展示します。同時に宮古島産の化石なども展示し、地球の歴史を紹介するなかで、島の地史を認識していただくつもりです。なお、この「移動博物館」は展示会のほかに講演会および映写会なども予定しており、その内容については以下のとおりです。

1. 開催期日：昭和58年5月20日(金)～22日(日)
午前9時～午後6時
2. 開催場所：平良市々民会館
3. 展示会
 - (1) 化石類(主なもの)
三葉虫、アンモナイト、プロバクトロサウル

ス、始祖鳥、パレリアサウルス、プロトケラトプス、タルボサウルス、サフロロフス、マンモス、ミヤコノロジカ、ピンザアブ人骨などおよそ30点

(2) 戦前の沖縄写真およそ68点

4. 講演会

(1) 日時：5月21日(土)、午後2時30分～4時30分

(2) 場所：市民会館4階中ホール

(3) 演題および講師：

・「宮古島の古生物化石について」

安谷屋 昭(宮古教育事務所指導主事)

・「沖縄の文化について」 大城立裕

(県立博物館々長)

5. 映写会

「戦前の沖縄」(ビデオ) 随時

6. 観覧料

無料

7. 共催など

(1) 共催

平良市、平良市教育委員会

(2) 後援

下地町教育委員会、城辺町教育委員会、

上野村教育委員会、伊良部町教育委員会、

多良間村教育委員会

(3) 協賛

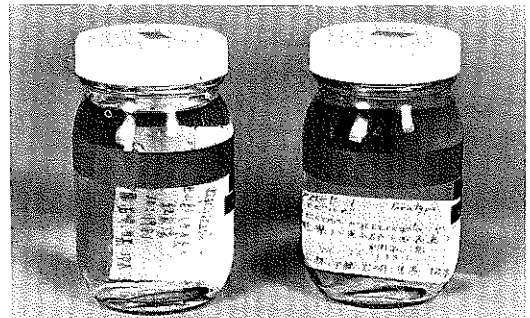
有村産業、南西航空

資料紹介

動物

ハゼの模式標本—クロオビハゼ

沖縄は、固有の豊かな生物相を有している。毎年、いくつかの新しい種類が発見されているが、沖縄での新種の発見はこれからも続くといわれている。このたび、西表島網取湾より新しい種類のハゼ(淡水や沿岸の水域に見られる小さい魚)が発見された。新種の学名は、皇太子殿下と目黒勝介氏等によって *Myersina nigrivirgata*(マイエルシーナ ニグリビルガータ)、また、和名はクロオビハゼと名付けられた。これは、皇太子殿下等が永年にわたって研究してきた成果によるものであるが、その新種の発表に使用された副模式標本(PARATYPE)が当館に保管されることになった。標本は、体長34mmの雄と体長38mmの雌で



1981年7月30日に採集されたものである。目の後縁から尾にかけて黒い帯状の線が体側上を走っているのが、本種の外部形態の特徴である。

「新収蔵品展」終る

前年度に収蔵した新資料を展示公開する目的で、毎年4、5月に開催している「新収蔵品展」が、今年は4月16日から5月8日までの正味17日開催された。場所は企画展示室。

57年度は、寄贈品2,962点、購入品26点、収蔵品471点で、合計3,459点にのぼった。寄贈品では、尚家伝来の三味線の名器「盛嶋開鐘」をはじめ、「御拝領工工四」、明治20年代の「八重山風俗図」、「港川人頭骨」(レプリカ)、シダ植物や昆虫の標本などが代表的なものとしてあげられる。購入品では、「琉客談記」や「南浦文集」などの歴史資料、中国冊封使の書跡、緋衣堂、赤絵対瓶などが出色している。

会場入口に考古資料と民具を展示し、会場内の壁ケース内は、自然から順に民俗、美術工芸品と



「野村風工工四」ほか (寄贈 沖縄市 山内盛彬氏)

歴史資料の順で展示した。しかし、会場が狭いため、数の多い自然史資料は一部だけの出展になった。会期中は、一般観覧者にまじって、寄贈者も顔を見せており、好評のうちに閉幕した。

感謝状の贈呈式行わる



感謝状贈呈風景

4月16日の「新収蔵品展」開場の日の朝10時から、館長室において、感謝状の贈呈式が行われた。これは、前年度の寄贈品のうちで、著しく資料的価値が高いものに対して贈るもので、「表彰規定」に照らして、今年は尚裕氏と山内盛彬氏の2氏に県教育長から、大山盛保氏、東清二氏、高良拓夫氏の3氏に館長から、それぞれ感謝状が贈られた。

尚氏は、戦乱で行方知れずになっていた王家伝来の三味線の名器「盛嶋開鐘」を、有償で返還してもらい、県へ寄贈した。山内氏は、永年琉球音楽研究のため愛蔵して来た「御拝領工工四」を含む12冊の工工四の寄贈。大山氏は、「港川人頭骨」(レプリカ)、東清二氏は、「沖縄産シダ植物標本」850点をそれぞれ寄贈したものだ。

ミニ・ニュース

洪積世末期(約2万年前)の乳幼児化石を発掘!

場所は、久米島具志川村下地原に形成された、全長約185mの洞穴である。1977年、久米島在住の久手堅絵さんが同洞内から鹿化石を発見した。その種類は、リュウキュウジカとリュウキュウムカシキョンで、いずれも約2万年前の洪積世末期のものであった。

当館では、1978年に予備調査を行い、1983年1月に正式な発掘を実施した。その時、多数の鹿化石と共に約50個の真白い骨片が発掘された。この骨片は、国立科学博物館人類研究部の佐倉朔室長の鑑定により、1歳前後の乳幼児骨と判明したのである。これは、わが国での最初の発見例ということになる。

職員 の 動 き

転出

- 館長 大城徳次郎 勸奨退職
- 副館長 名嘉正八郎 自治研修所教務参事へ
- 教育普及係長 宮城篤正 浦添市教育委員会へ
- 主事 玉村良子 教育庁財務課へ

転入

- 館長 大城 立裕 県立沖縄史料編集所長より
- 副館長 宜保栄治郎 教育庁文化課より
- 主事 仲里 富代 糸満青年の家より
- 臨任 津波古 聡 鏡が丘養護専門学校より

沖縄県立博物館だより No.16

発行年月日 昭和58年5月15日
 編集・発行 沖縄県立博物館
 住 所 〒903 那覇市首里大中町1-1
 TEL 0988-86-4353・84-2243